

Title	対岸のユートピア : 『実験家の運命』 その3
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 26 p.151-p.165
Issue Date	2002-03-22
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79879">https://hdl.handle.net/11094/79879</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 対岸のユートピア ——『実験家の運命』その3——

武 藤 洋 二

### УТОПИЯ НА ТОМ БЕРЕГУ

МУТО Ёдзи

#### Содержание

- 1 Граф мечтает о Советской Японии.
- 2 《Террор — наша чистота》.
- 3 《Стеклянные дворцы на курьих ножках》.

#### Примечания.

#### 1 「ソヴェト日本」を夢見る伯爵

築地小劇場の創設者土方與志は、1933年（昭和8年）4月に神戸を発って、5月24日モスクワに着いた。

左翼的演劇運動の指導者で、ソヴェト崇拜者である土方は、日本帝国の最上層部に属する。彼の父方の祖父は宮内大臣土方久元で、母方の祖母は天皇の相談役「元老」西園寺公望公爵の妹、祖父は旧大名である。妻梅子の父方の祖父は警視總監三島通庸、父は日銀総裁で、『不如帰』の川島武男のモデルである。母方の祖父は侯爵四条隆謨である。

土方夫妻は、夫が伯爵、妻が子爵の出である。軍人であった與志の父は、同僚の妬みによるいじめから自殺した。それほどの家柄に育ちながら、あるいは、だからこそ、ソヴェト演劇だけでなく、ソヴェト社会主義にあこがれる“赤”になった。土方與志は、財産を投入して築地小劇場をつくり、思想的にも形式的にも新しい民衆演劇の創造にとりくむことになる。その開始をうながした刺激の一つがメイエルホリドとの出会いである。

1923年（大正12年）彼は、ベルリンで演劇を勉強していた時、関東大震災の知らせをうけた。被災地に帰る在欧日本人にたいして、ソヴェト政府は、まだ外交関係がないにもかかわらず、ソヴェトを通過して帰国することを特別に許可した。このおかげで土方はモスクワに6日間滞在できた。彼は、メイエルホリドに会ってから、メイエルホリド劇場に向かった。

公演はフランスの劇作家マルセル・マルチネの戯曲「夜」を上演台本として、改作したもので、「大地は逆立つ」という、メイエルホリド自身の演出であった。

客席も無装飾、舞台もガラン洞、スポットライトのみの照明、客席を通過して舞台に馳せるサイドカア、思い切った俳優の動き、等々、すべて新鮮な発刺とした感じを与え、驚嘆せしめるのに十分のものばかりであった。

それから次の夜は、当時メイエルホリドの指揮下にあった「革命劇場」を見せられた。

ここでの出し物は、ソヴェト劇作家、ファイコの「リュリの湖」であった。

舞台には「構成主義」的装置が飾られて、そこでブルジョアの退廃的な生活が諷刺的に形式化され演じられたりした。

この二つの演出は「自然主義」的な、あるいは「印象主義」的な演出に疑問をもち、真実なものを探しもとめていた私にとって、真の演劇の開放がここに実現されているかのように感ぜられた。

後年私は、ドイツ留学時代の観念的な表現主義とともに、このとき激しく私を捉えた形式主義の影響に長く苦しめられるであろうことには気づかず、この新たな、奇智縦横ともいうべきメイエルホリドの演出に圧倒されてしまった。

私は、私のドイツ劇壇での研究を含めて数年間の演出の研究のいっさいは、このモスクワの一夜の観劇に及ばないものだと感じ、こうした意味のことを小山内先生にも述べたと記憶する。<sup>①</sup>

帰国して半年後に築地小劇場が始動する。

土方與志は、明治天皇も訪れた大邸宅に住んでいたが、特権的生活の拒否と演劇活動の資金獲得のために、小さな家に移り、何度も宿替えをし、長屋住まいをするまでになる。<sup>②</sup> 彼には帝政ロシアのナロードニキ的な信条と心情がみられる。

1933年、療養と演劇界の視察のためフランスへ行くという名目で、土方は、モスクワで開かれる国際革命演劇同盟（モルト）の世界大会と演劇オリンピックードに参加するため、家族と一緒に日本を発った。モルトの書記局には佐野碩が働いている。佐野は、演劇活動を通じて「無産者階級解放」をめざす日本プロレタリア劇場同盟（プロット）の書記長で、共産党の支持者として逮捕されたが、不起訴になり、国外へ出て、1932年ソヴェトへ密入国し、モスクワにあるモルトで働いている。土方もそこに席をもらい、全ソ演劇労働組合にも入り、ソヴェトの演劇界の正式な一員となった。

1934年8月ソヴェト作家同盟が発足した。創立大会の会期中、8月28日に土方は、「日本の革命的な作家と芸術家を代表して」日本語で発言し、日本における進歩的、革命的文学、芸術にたいする弾圧について説明し、労働者階級とそれに属する作家たちが「無階級社会の建設の発展と成功を活目して見守ってきたし、見守っている」とソヴェトへの期待を伝え、「ソヴェト日本」の創建を誓って発言を終えると、「嵐のような拍手」が喝采になり、全員起立して日本からの挨拶に答えた。大会幹事団を代表して作家フセヴォロド・イヴァーノフが答礼のため登壇し、ソヴェトの作家たちは日本の革命的作家たちが新しい芸術を創りだす助けに

なるだろうと述べた。<sup>(3)</sup>ソヴェト作家同盟における発言によって土方は伯爵位を剥奪された。

土方の発言内容は善と悪を対極化した直線だが、拍手している代議員たちの内心は複雑である。社会主義国家建設の基幹事業である農民集団化は、農民と国家権力との戦いになり、今年になって党は「勝利」を宣言し、自ら「勝利者」と名のつた。昨年、一昨年の穀倉ウクライナを中心とする大飢饉は、農民がこうむった戦災である。餓死者の数どころか、飢饉という事実そのものが機密事項となり、診断書に餓死と書いた医者が反革命的扇動の罪で銃殺になる。ソヴェト全土から集まった代議員、準代議員のなかには、犠牲者をだし続ける農民集団化の惨状を知っている者も少なくない。壇上で歌われる社会主義賛歌と隠されている実際との距離は、長すぎて、外国からの賓客には片方の端が見えない。これを心配した一部の代議員たちは、会期中に、外国の代表団あてに秘密のピラを作り、ソヴェトにおける裏表のすさまじさを分からせようとした。

血の赤い色は、表向きの言葉では、バラ色に変色する。やむをえず染織者になるソヴェト人とはちがって、土方は、知らないで、知らないのに、賛歌に和したのである。これは、彼のメイエルホリド評価にもあらわれている。自分が理想をともしする未来社会の建設者ソヴェト権力への盲信から、彼は、スターリン独裁下の芸術統制の枠内でメイエルホリドを見るようになる。

土方は、1933年末から1937年夏までの3年半の滞ソ中、メイエルホリドに接し、その演出作品を見ている。この期間は、メイエルホリドが、お上の注文を受けた批判者によって包囲され、追いつめられていく過程である。

「メイエルホリド劇場」では新たに発表したデュマの「椿姫」や、チェホフ的一幕物を見た。古い演出の「森」も見た。また「革命劇場」に彼の残した唯一のものとして保存されていたオストロフスキーの「収入の多い地位」を、またレニングラードの国立歌劇場でプーシュキンの「スペードの女王」の歌劇の演出も見た。

しかし私の滞ソ四ヵ年間、彼のソヴェトの現実を描いた演出を遂に一つも見ることができなかった。

思想、理論、手法、など、彼の演出者としての可能性は、いくたびかソヴェト戯曲を演じようと試みたにもかかわらず、もはやその要求するところのものに応じられなかった。

そのころ全ソヴェトの劇界は新しく、社会主義リアリズムの大旗がかかげられて活発な演劇創造が各劇団の間に競われていた。

彼は独り「演劇の革命」の成就者たることに安住し、自己陶醉に陥ってしまったのだといっても過酷の批評とはいふことはできまいと思う。彼は、ロシア革命の建設事業のなかでの文化建設の責任を忘れて、それから取り残されてしまっていた。一九三七年、彼はソヴェト劇界にまきおこったきびしい批判の前に立たされた。彼のみではなかった。自然主義、形式主義に堕した演出者、劇団は皆、この前に立たされた。

批判会はモスクワの一小劇場で連日行なわれた。客席にぎっしりつめかけたモスク

ワの演劇人の前に、彼も演壇である舞台上に現われた。小テーブルの前に腰をおろし、特に紅茶を持ってこさせて、自分の過去の事業を語り出した彼の姿はいま私の眼前にホウフツとしている。<sup>(4)</sup>

土方のこの皮相な感想は創作活動の内からでた演劇人の思いではなく、1936年から37年にかけての形式主義批判の大合唱に感化されたソヴェト崇拜者の言葉である。

土方夫妻は、現物を見ながら、実態を知らない余所者の観察者である。土方夫人梅子は、「農奴から解放されたロシア農民の姿」が夫を感動させた、「農民は農奴から解放されて農業をわが手にとりもどしました」と書くことができた。<sup>(5)</sup>

しかし「モスクワ裁判」期の肅清と周りの日本人の運命は、ソヴェト体制を信頼し愛情を抱いていたが故に、土方興志を混乱させる。梅子夫人によると、これが興志の「心を重く沈み込ませるに十分な材料」となり、彼は悩んで酒を飲んだ。

1937年6月土方と佐野は、国外退去を言いわたされた。これは二人にとって心外な仕打ちであったが、在ソ日本人にとっては例外的な幸運であった。この年の7月9日と10日に『ブラウダ』に日本人はスパイであるという論説が発表され、内務人民委員部では日本のスパイ××人逮捕という、計画経済まがいの数字が先行する計画がつくられた。日本人も日本に関係のあるソヴェト人も監視下にあった。しかも7月30日には、数字先行の大量逮捕の極秘命令が内務人民委員名でだされた。この数字消化のために、他の犠牲予定者とならんで日本人が狙われるのは当然である。元大阪外国語学校ロシア語教師ニコライ・ネフスキイが、14年間の日本滞在をねたにしてスパイ団をでっちあげられ、彼の日本人妻やロシア人の日本学者とともに、この年の秋にレニングラードで銃殺されたのは、その一つの結果である。

1937年、極東に住んでいる約167,000人の朝鮮人が、日本のスパイの温床だと見なされ、カザフスタン、ウズベキスタン等へ強制移住させられ、日本領南樺太や日本本土から遠くへ引き離された。これは日本人スパイ説と同根の政策である。<sup>(6)</sup>

土方と佐野は、恐ろしい年の最も恐ろしい時期の前夜に追放された。歴史的状況から見れば、これは解放と同じである。二人ともスターリン体制の犠牲にならないですんだ。

親ソ的であること、共産党員であることは、日本人の身の安全を保障しないどころか、むしろ危険であった。スパイは偽装しているという公式でソヴェト人は教育されているので、在ソ日本共産党員××は党員に偽装したスパイであると公式が当てはめられる。そのおかげで、ドイツ共産党員国崎定洞、日本共産党員山本懸蔵等ソヴェトで活動していた筋金入りの共産主義者がスパイとして銃殺された。彼らにとっては、憧れの地が死地になる。その殺害は極秘なので、新たにソヴェト入国を夢見る者がでてくる。

土方興志が、佐野碩と共に8月12日ソヴェトを離れ、フランスで苦しい生活をしている時、ある日本の演劇人が、土方や佐野がモスクワにいることを心強く思って、それを頼みにして、ソヴェトへの密入国を計画する。彼はメイエルホリドの崇拜者である。

## 2 「テラアは我々の純粋性である」

1928年(昭和3年)3月15日、日本共産党は根こそぎ逮捕され、共産党の隠れ蓑的役割をはたしていた合法政党である労農党も解散させられた。6月治安維持法に死刑が追加され、7月特別高等警察課が全県に設けられて、特高とよばれるこの政治警察によってあらゆる反体制的言動が取締りの対象になる。その中心的標的は、共産主義の思想と行動である。対外的にはソヴェトとコミンテルンが日本の司法当局にとって最悪の敵である。当時各国の共産党は、モスクワに本部のあるコミンテルンの支部で、本部から指令と資金を受けとる。日本共産党はコミンテルン日本支部であり、自主独立の革命政党ではなく、モスクワの指導を仰ぐ末端組織であった。コミンテルンは国際的な革命組織だが、スターリン体制強化とともに、独裁者スターリンの指導下に入り、国内政治でスターリンに反対したブハーリンとその同調者がコミンテルンから追放されたように、コミンテルンは独立した国際組織ではなく、ソヴェトの一機関まがいのもの、外局へと変身する。取締り当局が、ソヴェト・日本の線をつかもうとし、ソヴェトとの関係を犯罪視していたのは当然である。

昭和初期の息詰まるような思想統制下と、政治活動、労働運動への弾圧下で、左翼知識人が、同時に進行しているソヴェトの第一次五ヵ年計画という新社会建設のための壮大な実験に胸躍らせたのは自然である。断片的にもたらされるソヴェト発の情報には、集団的餓死も、農民で急激に拡大していく収容所も、強制移住も、銃殺もなく、楽園への歩みが描かれている。西側からの否定的な情報は、受取り手自身がデマとして葬ってしまう。なぜならマルクス主義を知った者は、その理論的根拠から、そうなるはずだという受け皿を持っているからである。彼らは、スターリン体制下のソヴェトを、その実体ではなく、マルクス主義に基づく社会主義国家の思想的・理論的設計図、予定図に照らして受けとめ、自分流のソヴェト像をつくる。これはスターリン権力が流す嘘を真実に変える水路になる。全世界に散在するこの流れへ意図的にソヴェトの宣伝が注がれる。

このような悲劇的受容を促進するのが日本の悪政である。国内での生活がひどければひどいほど、彼らのソヴェトに対する憧れが強まる。ソヴェト民衆へのテロの絶頂期1937年末ソヴェトへの密入国を計画した杉本良吉は、その典型である。

国内でつぎつぎに肅清事件が起きる。あつというま、またたくまに大物連中が消されて行く。在留外国人は尻をたたかれるようにして追い出されて行く。そのただなかへ、こっちから脱出の形で乗りこんで行く。まるで逆だったんじゃないのか。<sup>7)</sup>

1931年(昭和6年)、日本共産党に入党し、逮捕、転向、釈放を経験した作家中野重治は、時代がすっかり変わってから、かつての同志杉本良吉の行動についてこのように書いた。

逆であることが分かるには、「モスクワ裁判」期の、たとえば、モスクワ在住日本共産党員の逮捕、銃殺を知らなければならない。山本懸蔵が逮捕(1937年11月2日)され、銃殺(1939年3月10日)されたのも、秘密であり、スターリン時代以後は沈黙を破って、病死という嘘

が伝えられた。日本の共産主義者の前には、封印されたソヴェトの実情と、自分に敵対している日本の現状があった。この狭間でソヴェトが吸引力を発揮する。逆にソヴェトから日本へ共産主義者が脱出の帰国をしたら、日本の囚人になる。逆だったら解放があるわけではない。

スターリン体制が成立した1929年から大粛清の極秘命令が出された1937年までの期間、日本では、中国への侵略と国内での弾圧が強まる。思想的には親しいが、未知の国であるソヴェト社会主義共和国連邦を日本の対極として思い描く者が出てくる。杉本良吉もその一人で、彼は、自家製の絵に書いた餅へ亡命を図った。

杉本良吉は、ロシア革命の10年前、1907年（明治40年）2月9日に生まれた。本名は吉田好正である。父は学習院の数学教授だが、彼が14才の時、川へ投身自殺した。北大農学部予科へ入り、ここでロシア語の勉強を始める。中退して、早稲田大学の露文科へ入学し、ロシア語、ロシア文学を学び、演劇活動をおこなう。

1929年（昭和4年）わずか22才で翻訳を2冊——マルコフ著『ロシア革命と演劇』（叢文閣）、『労農ロシア戯曲集』（マルクス書房）を出版する。

ロシア革命は演劇の上に如何に働きかけたか？そして、革命後十二年の建設を経たソウエト演劇は如何なる成果を獲得したか？

この事は演劇に関心を持つものにとつて、殊に日本のプロレタリア演劇運動に携はるものにとつて、絶対的に知らなければならない事柄だつた。が、吾々が今日までに知り得たことの多くは、個々の劇場、個々の演出、個々の俳優に関する問題であり、稀に見る概括的な著述も非マルクス主義的な見解に據るものに過ぎなかつた。

本書の目的は右の欠点の幾分かを補ふことにある。

『ロシア革命と演劇』の「訳者序」にあるこの文は、杉本良吉の立場を表現している。しかも、「この訳書を日本プロレタリア劇場同盟（PROT）及び新興劇団協議会加盟劇場の同志諸君に贈る」という献辞がついている。杉本は、プロレタリアの解放とそのための演劇活動を行なう戦闘的組織プロットの執行委員である。

『労農ロシア戯曲集』には、ルナチャルスキーの『宰相と鋸前工』、アレクセイ・トルストイの『ダントンの死』が収録されている。

後者は、アレクセイ・トルストイによるゲオルグ・ビュヒナーの作品の翻案・改作で、1919年の版は、ポリシェビキーから批判された。ロベスピエールが、その残酷さ故に、否定的に扱われていた。1923年の版では変えられている。

ビュヒナーは、実際に革命運動にたずさわった作家であり、フランス革命はその重要な関心事であつた。彼は、革命と文学を仕事にして23才で死んだ。

杉本良吉は『ダントンの死』をどのように訳し、彼のロシア語能力は、どの程度だろうか。

ロベスピエール　善良なる市民諸君！諸君は諸君自身の手を以てフランスの土地を害する悪草をむしり取った。諸君は国境の外に敵を放逐して、太古に於てさへも其

の比を見ないほどの堂々たる威風を示した。昨日まで諸君は奴隷であった。今日諸君は偉大なる民衆である。併しながら忘れてはならない、我々が我々の権利を、新しい人間の権利を、即ち自由を、平等を、博愛を維持するためには、これからもなほ非常な努力と勇気が必要であるといふことを忘れてはならない。敵は未だなほ悉く敗北したのではない。敵は諸君の間にもゐる。(226頁)

「フランスの土地を害する悪草を」は、ロシア語原文の直訳では、＜悪草をフランスの土地から＞となり、「我々の権利」は、＜あなた達（諸君）の権利＞である。前者は誤訳ではなく、意識であり、後者は単語の見間違いか、あるいは文意上このほうがいいと思ったのだろうか。

ロベスピエール 私は飽くまでも繰り返すであらう。フランス民衆の神聖なる任務は次の如きものであるといふ事を。即ち、全世界の上に最も貴高なる正義と自由と平等と、而して博愛とを断乎として打ち建てること・・・人類を溺れさせるところの凡ゆる唾棄すべき悪徳を悪草の如く根元から引抜いて棄て去ること。そのためにこそ、革命は実現されたのであり、そのためにこそ共和制は打ち建てられたのである。共和国の武器は他を畏怖せしめることであり、共和国の勢力は徳である。しかし乍ら徳は冷厳なしにはあり得ない。悪徳の盲動に対して無慈悲に闘争することこそ最も偉大なる徳である。テラアは共和国の純粋性である。人は我々を吸血鬼と呼ぶ。私が人間の心臓を手につけて盃の中へ生血を絞りこんでゐる図が諸外国に於て非常な人気を博してゐるといふことを私は知つてゐる。我々が奴隷たる境遇に甘んじようとしなさいといふ正にそのことのために人々は、唾棄すべき偽善を以て我々を憎んでゐるのだ。我々が共和国の敵共の陰謀に対するにテラアを以て応へる時、常に外国では恐怖と憤怒の波が湧き立つてゐる。テラアは我々の力であり我々の純粋性であり、我々の正義であり、我々の慈悲である。いまテラアの廃止を説教することは、共和国並びにフランスの滅亡を説教することに外ならない。

人々の声 万歳、ロベスピエール！公安委員会万歳！テラア万歳！（233頁－234頁）

訳者は、たんなる紹介者ではなく、日本革命を夢見る青年だから、感情移入がおこり、「断乎として」、「凡ゆる」など原文にない言葉をいれて、文意を強めている。「といふことを私は知つてゐる」もロシア語には無い。「人類を溺れさせるところの」は、未熟な拙い訳で、＜人類がどっぷり浸かっている悪徳＞という意味である。「棄て去ること」の後に、原文では＜ここにこそフランスの偉大な目的がある＞と続くが、これは訳し忘れている。「波が湧き立つてゐる」は、＜叫び声があがる＞が正しい。ヴォプリ（叫び）をヴォルヌイ（波の複数形）と勘違いしたのだろうか。あるいは、強意のために変えてしまったのか。少し不備はあるが全体としてこの訳は正確であり、真面目な仕事である。



テロは革命政権の純粋性、正義、慈悲だというロベスピエールの演説を、訳者は、おそらく共感しながら訳しただろう。革命の完遂のために敵を断頭台に送り、自分もそれで頭を切り落とされた、この権力者の運命は、革命が革命家を貪り食う一例である。同時代のソヴェト権力が革命家を喰らっていたことを、杉本良吉は、敵の処分だと信じていたのだろう。彼はソヴェト版のテロが自分自身にむけられるなどとは、想像もできない。

訳者杉本良吉は、演劇界に身を置く革命家であり、演劇を通じて社会主義と日本革命のために闘う。ソヴェト演劇を研究するのは、しかし、それがただ単に社会主義国の演劇だからではなく、そこにスタニスラフスキ、メイエルホリド等々の日本から仰ぎ見る星が輝いていたからである。『ロシヤ革命と演劇』には佐野碩が提供した舞台写真が十数頁にわたって掲載され、その中ではメイエルホリド関係が最も多い。メイエルホリドへの思い入れが感じられる。この本には1927年5月に開かれたソヴェト共産党演劇会議の報告書の全訳がのっている。

この全訳紹介は、「近き将来に何等かの形で翻訳発表しようと思つてゐる党の決議と共に、吾がプロレタリア演劇運動の進路に決定的な方向を与え得るものである事を深く信ずる」、と訳者は書く。日本の演劇運動のために、ソヴェト演劇とソヴェト共産党の演劇政策から何かを学びとろうとする姿勢がここにはっきりあらわれている。

杉本良吉は速読ならぬ速訳をやった。昭和5年トレチャコフの『吼えろ支那』を土方與志演出で上演するさい、杉本がロシヤ語に訳していく様を目撃した浮田左武郎はその早業に感心した。

当時、私たちは築地小劇場に集って、徹夜して自分たちの台本を印刷した。そのてんやわんやの騒ぎにもたじろがず、杉本良吉は築地小劇場の楽屋に突っ立ったまま、トレチャコフの原本をぶつつけに訳していた。楽屋の化粧棚に原稿用紙をひろげて、助手の松尾哲次がそれを片端から筆記してゆく。それがすぐに謄写版係に廻ってゆく。まるで日本語を読むようなよどみない早さで訳し続ける杉本良吉の美事さ。右手が疲れると、無雑作にペンを左手に持ち変えて、平然と筆記を続ける松尾哲次の特技。左翼劇場から派遣のこのコンビはおそろべき高能率である。<sup>(8)</sup>

杉本良吉は、昭和11年7月に女優岡田嘉子と知り合い、深い仲になってからは、たとえば、『アンナ・カレーニナ』の台本を口述で訳し、彼女に筆記させている。数日間で完成したので、劇団が驚いた。<sup>(9)</sup>

あいつづ集団檢舉で壊滅的打撃をうけながらも地下活動が続けている日本共産党へ、昭和6年(1931年)杉本良吉は入党した。この年、奉天ちかくの柳条湖で満鉄の線路が爆破され、これを口実にして関東軍と中国軍との間に戦闘がおこり、中国との「15年戦争」が始まった。日本の国策会社満鉄の線路爆破は、満鉄を守備する関東軍によって行なわれ、中国軍の仕業だと発表された。この謀略によって日本は大規模な軍事行動をおこし、中国東北部に傀儡国家を作って、昭和7年3月1日に満州国の、昭和9年3月1日に満州帝国の建国を宣言する。

外での侵略と連動して、内では共産主義思想、革命・反体制運動だけでなく、いわゆる自

由思想、個人主義の類も非常時下の日本に敵対するものとして封じられていく。検閲が猛威をふるい、表現活動である演劇は、拘束衣を着せられる。

ソヴェトではスターリンの個人独裁が完成し、同じ時期の日本では、神聖不可侵である現人神天皇の権威の下で官製の暴力が、全土を押さえていた。

弾圧は、勿論これ以前からあり、昭和3年の共産党員と協力者の一斉検挙で捕まった徳田球一は、拷問をうけたが非転向でがんばり、裁判にかけられた。

公判闘争のはじまるころから、外では満州事変が開始され、軍部の権力が強まり、反動的な空気がいちじるしく強くなってきたが、この情勢は法廷にも反映し、敵がわは法廷のなかで暴力をふるうようになった。あるときは裁判長が、法廷における警察権行使の限度をこえ、壇上におどりがあがつて、看守がわれわれを手錠などでなぐるのを指揮するという狂態まで演じた。わたしが弁護士と話していると、剣道三段とか四段とかいう看守がわたしのえりをひきずりあげ、それをわたしも蹴とばしたことがあった。<sup>(10)</sup>

この光景は、年と共に凶暴化していく国家権力の図解である。

共産主義運動が圧殺され、展望と希望を失い、拷問による取調べに耐えられず、転向者が続出する。日本共産党の指導者佐野学、鍋山貞親は昭和7年10月に無期懲役の判決をうけ、翌年6月転向声明をだした。

昭和6年11月に結成された日本プロレタリア文化連盟（コップ）のなかでも杉本良吉は活動する。この年、ヴェ・バフメーチエフ作、杉本良吉訳『マルチンの犯罪』（鐵塔書院、394頁）がプロレタリア科学研究所とソヴェート文学研究会編集による「ソヴェート作家叢書」の一冊として出版された。<sup>(11)</sup>

### 3 「にわたりの足をしたガラスの宮殿」

昭和7年3月プロレタリア文化運動にたずさわっている者400人以上が逮捕された。杉本良吉も狙われていた。彼は、築地小劇場で舞台稽古中に警察に踏み込まれたが、逃走し、以後、街を歩くときは変装する。地下生活が始まったのである。宮本顕治や小林多喜二も地下にもぐった。

昭和8年2月20日、小林多喜二が築地署で拷問死した。これから5ヵ月後、七夕の日に杉本は神楽坂の路上で逮捕された。

日本共産党員杉本良吉は、拷問付きの取り調べをうけた後に起訴されたが、政治活動から足を洗うと約束することによって12月に保釈された。これは広い意味で転向である。しかし思想・理想は捨てない。

この転向者は、昭和11年2月、治安維持法違反で懲役2年執行猶予5年の刑をうけた。死刑にもできる改悪版治安維持法下では、これは転向者にたいする軽いお仕置きである。

監視下にあつて杉本良吉は、活発に演劇活動をおこなう。築地小劇場だけでも

昭和11年9月

『エゴール・ブルーイチョフとその他の人々』

ゴーリキイ作、杉本良吉訳、千田是也演出

同 10月

『転々長英』

藤森成吉作、杉本良吉演出

昭和12年3月

『北東の風』

久坂栄二郎作、杉本良吉演出

同 9月

『アンナ・カレーニナ』

トルストイ作、杉本良吉訳・演出

というように精力的に働き、これ以外に、井上正夫の「中間演劇」の演出を何本も引き受けた。

執行猶予の判決からソヴェト密入国までの2年間に、杉本良吉は、このような演出の仕事以外に、翻訳を2冊完成させている。ナウカ社の依頼でオストロフスキイの『鋼鉄はいかに鍛えられたか』を訳したが、ソヴェトの政治と文化の紹介を業とするナウカ社は弾圧され、訳書は没収された。彼は、その後キルシヨンの『すばらしい合金・風の街』（昭和12年、改造社）を翻訳出版している。

翻訳であれ脚本であれ、うるさい検閲をとるようになければならない。劇の場合、脚本を2部警視庁に提出し、認可台本をもらう。脚本への検閲は暴力的で、意味のつながりまで断ち切られることがある。県ごとに検閲があるので、巡業のさいには、地方ごとに上演内容が変わることもあった。ある地方では、藤森成吉の『何が彼女をそうさせたか』の火事の場面が不許可になった。火事はアカだ、というのがその理由である。<sup>(12)</sup>

芝居をやるといっても、まず脚本を警察に出して検閲を受けなければ、舞台を開けられない。ところが検閲から返ってくると、台本によっては、ベタベタに赤札が貼ってあるんです。朱でずうっと消してある。もう何もかも削られたら芝居になりませんからね、あんまりひどいときには、その芝居をやめて、他のものに変えるよりしょうがないんです。

客席の後ろのほうには検閲官の席が設けられていまして、そこで台本を見ながら、いつも監督してるんです。朱筆で削られたところを、うっかりしゃべりでもしようものなら、「ストップ！」ってとたんにどなられるんです。そうすると芝居は中止で、それ以上続けられないでしょ。お客さまにも悪いから、そんなことが起こらないように、やっぱりこちらは折れざるを得ないんですよ。

思想的なことはもちろんですけど、ラヴ・シーンもうるさいんです。「あなたが好き

よ」ぐらいまではいいけれども、行動のほうは——抱き寄せるぐらいまでで、キッスなんてもちろんいけない。何かというと、あとで楽屋に来て、「今日のここ、そこはいかんから、以後つつしめ」ってことになるんです。芝居がやれなくなったら困りますでしょ。ですからみんな言うこと聞きますよね。

それから、いやだったのは、昭和十二年の中ごろ、中国との戦争が始まったでしょう。芝居が終わると全員が舞台に並ばされるんです。そうして、「ただいま皇軍がどこどこで勝利をおさめたという報道がはいりました」と言って、「バンザーイ」をやらされる。俳優全部総出でやらなきゃいけないんです。あたくしには耐えられなかった。ですからあたくし、そういうときはいつも、後ろのほうに隠れてました。<sup>(13)</sup>

岡田嘉子が証言する昭和初期の状況は、基本的には、同時代のソヴェトにおける芸術がおかれていた状況よりはましである。しかし杉本良吉には、ソヴェト芸術は別天地に在るとおもわれた。

秋田雨雀は僕らの芝居に明るさが足りないということをプロットの時代からよく云っていた。又去年の七月号の本誌巻頭言でも、「組織者の性格」という短文の中で、「ソヴェトのあらゆる文化活動の中で、組織的任務についている人の性格の明るさ」について語り「日本の演劇運動に於いて指導的な位置にある人々に欠けているものは、この性格の明るさということではないかと思う」と述べている。

尊敬すべき先輩のこの言葉を一応判った積りでいた僕は最近あることでドカンと頭をどやしつけられた。

それは、時間にすれば、僅か五、六分ですむ実写映画なのだが。

映画館で見た朝日映画ニュースの最後に、モスクワの赤色スポーツ祭の実写が収められていた。揃いの白いユニホームで赤い広場を行進する青年男女の隊列、大きな作りもののタンクの上に銃をかまえて立っている労働者農民、兵士、垂れている頭をつぎつぎと上げて行く娘たちの動きが激しい機械の波動のように見える、逞しい男たちが上段に並んで腕を組む、下段には健康そうな娘たちの組まれた腕がゆれるゆれる、ピストンの物凄いうねり。俯瞰撮影で広場の全景が撮し出される。踊り廻る人群れ、その動きが星のきらめきになる。レーニン廟の上に立っている指導者たち、スターリンの大きな笑顔、ここでは、国防と保健と芸術とスポーツとが一つの流れに注ぎ込まれて、切離し難いものになっている。

見ていると喉がゴクゴクして来た。残念なことに人込みの中で両手に荷物を抱えて観ていたので拍手することが出来ないのだ。

この明るさ、晴々しさこそ秋田雨雀は云ったのだろう。僕らの行手にこうした明るさがあるとしたら何と喜ばしいことではないか！この困難な（人が好んで暗い暗いという）環境の中で、あの明るさをゆるぎなく胸の中に刻みつけることの出来る確信を持って居たいものだと思う。<sup>(14)</sup>

集団の和と力を誇示し宣伝するスポーツの祭典は、祭りにふさわしく明るさ、新鮮さ、力強さが演じられる。映像にただよう明るさは、祭り用の御馳走であり、普段の食事ではない。ソヴェト体制は、一貫して“明るい”。「ソヴェト的楽天主義」が普段着となり、祭り、儀式では明るさが強度を増してそれが晴れ着に変わる。夫が無実の罪で殺された未亡人も楽天的にふるまう市民的義務があった。犠牲者の悲しみは国家への恨みであり、反逆である。文学にも演劇にも絵画にも映画にもソヴェトの現実にたいする悲観、絶望は禁忌である。楽観主義は国民服になる。外国へ輸出される「実写映画」が「明るさ」に満ちているのは当たり前である。杉本良吉にはその光に特別敏感に反応する受光器がそなわっている。それは地球上ただ一つの理想の国にたいする憧れであり、「僕らの行く手」ソヴェト日本の夢である。

ソヴェト国家権力によって「余所者」あつかいされていた詩人オーシップ・マンデリシタームにとって、個人が集団になり、その群れがあらかじめ引かれた線にそって行進する競技場は、民衆が群れとして操縦されている場である。

若者たちと足をそろえて  
線引きされた競技場へ出るものか  
オートバイの出頭命令書に起こされて  
夜明けに寝床から飛び起きるものか  
にわたりの足をしたガラスの宮殿に  
たとえばかない影になっても入るものか<sup>(15)</sup>

これは、第一次五ヵ年計画と農民集団化の最中、1931年夏に書かれた詩の断片である。穀倉ウクライナでは集団化による人災的飢餓が中世の黒死病のように百姓を倒していく。餓死は国家の極秘事項になる。何百年の隷属、貧困から解放されコルホーズ員になった者の笑顔が輸出される。

マンデリシタームは、この詩で、集団化の輪に入ること、警察国家の一員になること、来るべき死の国へ入国することを拒否している。

「ガラスの宮殿」は、「水晶宮」である。ロンドンの万博のために造られたガラスと金属の巨大な建物クリスタル・パレスは、これを見た2人の作家のおかげで未来社会の模型としてロシヤ文学に入った。チェルヌイシェフスキは、未来のロシヤに予定される理想社会として水晶宮を借り、ドストエフスキは、それを飼いならされた畜群の国家、反理想社会として使った。マンデリシタームの「ガラスの宮殿」は、後者の増補版である。

スターリン支配下の「水晶宮」から、まもなく「にわたりの足」が生えるだろう、と詩人は呪いをこめて予言する。ロシヤでは子供も皆知っている民話の常連、死神ヤガー婆は、人骨の塀をめぐらし、にわたりの足の上ののっている家に住む。その住まいの正体は、棺桶である。「にわたりの足をしたガラスの宮殿」は、死神が主人として君臨する人工的反理想社会である。それはロシヤの土俗的闇と結合して、ロシヤ型の「水晶宮」となる。マンデリシタームは、この年の春にスターリンを、死神、人食いであるヤガー婆にした詩を作っている。鉄

とガラスの人工国家の主人はスターリンである。

杉本良吉は、はるか遠くからこの建物を見て、ドストエフスキイの「水晶宮」をチェルヌイシェフスキイの「水晶宮」と取り違えたのである。

杉本良吉は、婚姻届をせずに杉山智恵子と暮らしている。杉本は、彼女を大切にしている。この内縁の妻は、重症の結核患者であり、しかも、貧しい生活に耐えていた。

岡田嘉子も結婚している。この点で二人は自由ではない。同棲生活には影がある。杉本は、監視下にある危険人物だから、芸術家としても共産主義者としても自由に活動できない。しかもいつ戦地の危険地帯へ送られるか分からない。

彼の心には転向者の生々しい深い傷がある。一般的に、悪から目覚めた真の転向者の場合は、解放感にひたれる。杉本良吉が日本の国家権力に捨てる約束をしたものは、理想社会の建設事業である。それが偽装転向という方便だとしても、あるいは、そのような観念操作で自分を落ち着かせようとしても、心底の暗雲は晴れない。ただし彼は、拷問にもかかわらず黙秘を貫きとおしたので、党への裏切りという心のやましさは無いとおもわれる。この点で多くの転向者とは異なる。

1930年代の大弾圧期に日本共産党の指導者で、委員長にもなった山本正美は、当時「なだれ現象」として発生した転向者を「おしなべて共産主義運動の裏切り者であった」とみなすことに反対している。<sup>(4)</sup> 彼は、「真の裏切り者」と「敗戦者」、「敗北者」とを区別すべきだと主張する。負けた者は、戦況の好転にしたがって正当に戦列へ復帰できる。杉本良吉は、一時的に負けたのである。この「敗北者」は、ソヴェトでの復活を夢み、モスクワで思う存分に演劇活動をしたいと思っている。素晴らしい作品に出会っても、検閲を考えて、上演をあきらめてしまうことがある。自分で自分に禁止するのである。このような状況から脱出したい。

杉本良吉は、途切れてしまったコミンテルンとの連絡をつけるため1932年（昭和7年）に、党からソヴェト行きを指示されていた。北海道から海路ソヴェトへ密入国しようとしたが、あまりにも非現実的な計画なので、取り止めになった。杉本良吉にとって、ソヴェト行きは、願望であり、同時に宿題であった。

杉本は、一年近い囚われの生活が胸に染みついているらしく、壁ぎわに寝るのをいやがりました。独房を思い起こす、ということです。また、ともすると、親指をギュッと握り占める癖がありましたが、それは拷問の苦しさを耐えるための習慣が抜けないのだ、と官憲に対する憎しみをこめて語るのです。そのとき受けた拷問の激しさは、彼の太股に、見るも無惨な紫色のアザを大きく残しているのです。彼は、ヒョロヒョロしたみかけに似合わない「剛毅な精神と未来を確信する姿勢の持主」（菅井氏の言）でした。

いよいよソ連への脱出を決意したときでも「日本は決してこのままではない、いまにきっとよくなるんだから、そのときはぼくたちも、立派な“おみやげ”を持って帰って来よう！」と言っていたのです。

彼が、党の指令を実行するために云々、のことは、もちろん、私は知りませんでし

た。けれど、越境してソ連へ、とさきに言い出したのは私です。そのとき彼の顔色がパッと明るくなったのは事実です。そして、五年前に北海道から船で渡ろうとして失敗したことを話してくれました。また「もし、モスクワへ行けたら、ぼくにはコミンテルンの仕事があるから、きみは演劇の勉強をするといい」と言って、出発前に、友人の人々にそれとなく別れを告げに廻ったこと、宮本さんを獄中に尋ねて逢ってきたことなども話してくれました。後、モスクワで宮本さんにお逢いしたとき、「あのとき、ぼくがマンドート——指令書に代る紙片でも渡せたらなあ！」と言おっしゃって下さいましたが、獄中にある身で、そんなことができなかったのは当然です。<sup>(17)</sup>

岡田嘉子は、日本脱出直前の状況をこのように語っている。宮本顕治が信任状、身分証明書のためぐいを杉本に渡していても、おそらく、彼の運命は変わらなかっただろう。

サハリン島は、南半分が、1905年、日露戦争によって獲得した日本領南樺太で、島の真中を国境線が通っている。線の向こうはソヴェトである。ここにも日本の利権があり、「なかでも北樺太石油利権は、我が国の石油経済に極めて重大なる役割を演ずるに至った」。<sup>(18)</sup>ところが1936年11月日独防共協定が調印されたため、ソヴェトは、1937年には北樺太石油会社や北樺太鉱業会社への日本人労働者の入国を不許可または数の制限をおこなうようになり、<sup>(19)</sup>この点でも日ソ両国の関係には不協和音が増していく。ソヴェト抹殺を目的にするヒートラーのドイツと手を結んで共にソヴェトに敵対することを明確にした日本を、ソヴェトが敵視するのはあたりまえである。

サハリン島（樺太）の真中を走る日ソ国境線は、ソ満国境線とならんで、張りつめている。領土内に日本の利権があるという特別の状況から、とりわけここではスパイの出入りを阻止する厳重な警戒がとられている。

杉本と岡田には、樺太に日本領からソヴェトへ陸つたいに渡れる“道”がある。その国境は、ソヴェトの門であり、二人に開かれるはずである。密入国だから逮捕される、しかしなんとかなるだろう、モスクワに行きさえすれば、いい。この楽天的な見通しがなければ、動けない。

八木隆一郎作『熊の唄』を演出したさい、知識不足から主人公アイヌ人の扱いに困り、杉本は、アイヌ研究の必要性を感じた。彼は、これを口実にすることに決め、アイヌの調査旅行だと偽って、昭和12年12月27日に東京を発ち、杉本と岡田は、北海道から樺太へ向かい、12月31日に樺太の敷香（しすか）に着いた。

それから先は汽車がない。橇が要る。国境を見物し、ついでに国境警備の屯所を慰問したい、と2人の芸能人は申し出て、警察から橇を借りてソヴェト領めざして進んだ。

時は、ソヴェトで7月30日付の内務人民委員命令に基づいて数字先行の人間狩がおこなわれている真最中である。日本人を見たらスパイと思え、と言う政治教育が行き渡っている頃である。将来の交戦国日本と接している北樺太の国境警備隊は、対日本防衛の最前線に在る。

1938年1月3日彼らの前に、雪の中を泳ぐようにして日本人の男女があらわれた。

(つづく)

注

- 1 『演出者の道 土方與志演劇論集』 未来社 1975年 185-186頁
- 2 築地小劇場で働いていた横倉辰次によると、「劇場は六月の第一回公演以来、不入りを重ね、その赤字を土方与志が単独で補った。一周年までに当時の金で二十万円あまりを投じたそうだ。今日（一九七〇年）の貨幣価値に換算するとざっと六億円あまりだ。」（『銅鑼は鳴る 築地小劇場の思い出』 未来社 1976年 73頁）
- 3 Первый всесоюзный съезд советских писателей 1934. Стенографический отчет. Советский писатель, Москва. 1990. сс.477-479.
- 4 『演出者の道』 186-187頁
- 5 『土方梅子自伝』 早川書房 昭和54年 222頁
- 6 Павел Полян. Не по своей воле. История и география принудительных миграций в СССР. О. Г. И. Москва. 2001. с. 91.
- 7 『甲乙丙丁』 中野重治 講談社文芸文庫 1991年 下巻 150頁
- 8 『プロレタリア演劇の青春像』 浮田左武郎 未来社 1976年 52-53頁
- 9 『心に残る人びと』 岡田嘉子 早川書房 1983年 196-197頁
- 10 『獄中十八年』 徳田球一、志賀義雄 時事通信社 昭和22年 67頁
- 11 本には訳者として杉本良吉の名だけが記されているが、フリーチェ著『欧州文学発達史』（鐵塔書院、昭和5年）の巻末広告では、藏原惟人との共訳となっている。なおフセウオロードフスキ著、杉本良吉訳『ソヴェート演劇史』も広告されている。
- 12 『プロレタリア演劇の青春像』 57頁
- 13 『ルバシカを着て生まれてきた私』 岡田嘉子 婦人画報社 1986年 44-45頁
- 14 『演出者の手記 杉本良吉演劇論集』 新日本出版社 1980年 96-97頁
- 15 Осип Мандельштам. Сочинения. Художественная литература, Москва. 1990. т. 1. с. 182.
- 16 『激動の時代に生きて 一共產主義者の手記』 山本正美 マルジュ社 1985年 217頁
- 17 『心に残る人びと』 198-200頁
- 18 『ソヴィエト讀本』 外務省情報部編 改造社 昭和13年 93頁
- 19 同上 94頁

(2002.1.17受理)